

明日のために やるつもり、脱出!

東日本大震災後、防災に関する情報をたくさん目にするたびに、「備えておいた方がよい」とやるつもり、でいました。今回は、このやるつもりを脱出し、できることにチャレンジしました。

はじめの一步

地元在住ではなく、引っ越してきて立川に住み始めた私の家族。勇気が無く、なかなか地域の防災訓練に参加することができないでいました。でも、機会をつくって参加はしてみたいと感じていました。そこで、一歩踏み出すきっかけとして、市民編集委員の松井さんと一緒に「防災とは何ぞや?」を知るために立川防災館の防災体験に参加しました。



▲煙体験 姿勢を低く布を口にあて、壁の右側に沿って出口に向かいます。

当日、体験を目的として来館している人が多いのにまず驚きました。震災以降、来館者が急増し(年齢層も幅広い)、皆さん真剣に5つのコーナー(防災ミニシアター・地震体験室・煙体験室・消火訓練室・応急救護訓練室)を体験されていくとのこと。順番に体験していくと、体験だと分かっていても緊張と不安が同時にやってきます。実際に災害が起きたとき、対応方法も予備知識も全く知らなかったら余計にパニックになるだろうとあらためて感じました。

体験を終えて、「いつくるかわからないから準備しないというのではなくて、きても基礎的な対応の心得と準備さえあれば、パニックを防げるんですよ。これからの社会は、他人を救おうとする人が自分も救われることにつながるんだと思います」と防災館のご担当者からの説明があった時、ドキッとした。

誰のために

昨年3月の市民編集委員の特集ページで取材をさせていただいた渡邊さんのアドバイス(応急処置の方法を学び実践しておく)と人を助けるのに役に立つことを実践してみたいと思ったので、実践の場を提供している、上級救命講習(公益財団法人東京防災救急協会主催)を立川防災館で受講しました。内容は、年代別・状況別に対応する、胸骨圧迫・AEDの取り扱い方法や、三角布を使った応急処置のやり方を実践を中心約8時間かけて学びます。初めのうちはドキドキ感と初対面同士というところで恥ずかしい気持ちで声も小さかったのですが、参加者の中の、中学生や一人で参加している方が、大きい声で周りの人に助けを求め練習を熱心に受講している姿に感動し、「いざというとき、通りに過ぎないで、行動を起こさず」という勇気をもたらした気がします。



▲地震体験 マグニチュード7.0は動けないほど強烈。地震発生から収まるまでの取るべき行動を体験できます。



▲地震体験 マグニチュード7.0は動けないほど強烈。地震発生から収まるまでの取るべき行動を体験できます。

何度か実践を丁寧に教えて下さるので、終わるころには、体が覚えていく感覚に(この講習で取得できる上級救命技能認定の有効期限は3年ということ。忘れたころの3年後に再講習を受けることで、継続的に体で覚えていくように考えられているそうです)。

この講習が震災後、受講する人が増えたので予約ですぐにいっぱいになるとおっしゃっていました。防災対策を「やるつもり」の方は、右表の心得3つを踏まえて、できることからやってみることをお勧めします。(山崎)

▲防災について 市防災課・内線2535 防災体験館について 立川防災館(521) 1119 上級救命講習について 公益財団法人東京防災救急協会(03)52760995

やるつもり脱出心得3つ

1. すべての災害を防ぐことはできないが、事前の準備・心得で被害を減らすことができる

準備をすることで、不安な気持ちを減らすことができます。自分の生活スタイルにあった備えをしましょう。

【家中では】①転倒防止器具は正しく設置する②備蓄用品(食料・水・カセットコンロ・簡易トイレ)は住居人×最低3日分(できれば7日分)③枕元にスリッパを用意する④懐中電灯、ラジオは分かりやすいところに置く

【外出時は】かばんに防災マップ(家族などの連絡先メモを抜んでおく)・ホットシート・携帯非常食・マスク・飲み物を入れておく(右写真)



2. 自分自身の身の安全を確保することが一番大事!

自身が無事でなければ、家族や周りの人を助けることはできません。

3. 共に助け合う気持ちを持ち協力しよう

①必要な人が公共施設を使えるように、自宅が大丈夫であれば自宅へ過ごす。
②救急・復旧のための車両がスムーズに通行できるように車の使用を控える。

編集後記

●市民編集委員って何が面白いの? 知人に尋ねられることもしばしばです。まず、普段は行かないところに行ける、なかなか会えない人に会える。これが最大の特権です。えーっと以上です。特権ではありませんが、1年かけて丁寧に記事を書けるので、立川で暮らしを便利に情報、楽しいイベントなどをたくさん知ることができました。ますます立川が好きになる。それが市民編集委員の最大の魅力かもしれません。(坂下 共)

●昨年春、市民編集委員への参加は、迷った挙句締め切りギリギリの決断でした。それから2年、ほかの委員のお2人や市の担当者の方々と、忘れられない時間を過ごすことが出来た。ありがたうございました。さあ、次はこれを読んでいるあなたの出番です。左記の市民編集委員募集の案内をよく読んでご検討ください! (松井 信雄)

●もう最終回。市民編集委員として参画したことで、私の住んでいる街が「今」抱えている問題やうれし話、へーという話など、直に触れることができました。応募しなければ、きっと出会うことがなかったメンバーと同志となり2年間活動できたことは、人生の中で宝物になりました。これからも人と街と繋がっていきたい。(岩崎 圭)



左から岩崎、松井、坂下

2つの説明会

平成21年の暮れ、当時市報に掲載されていた「ごみ分別の説明会」のお知らせの小さな記事。分別に3割、どんな人たちが何人集まるのだろうに7割の興味を持ち、近所の会館で行われた説明会に参加したことがある。市報に予定100人と書いてあった会場に私を含め、一般参加者は6人。うち2人は始まるか始まらないかのうちに帰ってしまっただけ。残った4人は逃げるに逃げられなくなり(私はそう思っていた)、来場者より説明スタッフの方が多く不思議な第1回説明会が始まった。

冒頭に説明会の主旨やタイムスケジュールなどが説明され、後半は少し長めに質疑応答の時間が取られていた。その質疑の時間になると私以外の3人が、1つのごみ置き場に2種類のごみが出る、容器プラとそうでないもの、分別の基準など矢張り疑問を投げている。小さな市報の記事を見つけた、夕方の忙しい時間にこの会館に駆けつけ、質問をしてまでごみのごみ私に気になる人がいることに、そして昨年7月、戸別収集・

処理現場

この2つの説明会の際に、西砂町の総合リサイクルセンターや若葉町の清掃工場取材のご機会はいただいた。総合リサイクルセンターでは、手袋は装着しているもの、手作業で異臭のするリサイクルごみの分別をする作業員の姿を、清掃工場では新混在した性能の異なる焼却炉を、スタッフの方がごみをローテーションしながらごみを処分していく姿を見学させても

無関心

場面は、有料化説明会に戻る。市の職員の方から、循環型・低炭素化社会の構築、日の出町最終処分場延命化、そして若葉町清掃工場の問題などが挙げられ、市のごみ処理に対する方向性や問題点が提示された。特に清掃工場は平成20年までに現在地からの移転を地域住民と約束しており、それがほごにされている緊急性の高い問題とのことだ。今回の説明会も、後半の多くは質疑応答の時間が取られていた。「分別方法など聞いていない」とちよつと困った年配男性の質問。それに答えようとする来場者の女性。「有料化ありますか!」とキビシイ質問も飛び交う。「多摩地域全体で考えれば仕方ない」という肯定的な意見も出されている。ごみ処理に対して、多少の勘違いはあるとしても、この会場に足を運んでいる人々の意識が高いことを感じた。

知らないだけ?

勘違いは、広報紙に目を通し、施設見学に足を運べば理解できることも多い。意識の高い人に勘違いをさせないように、もう少しうまく広報できないものだろうか。ごみに関する広報活動は、どの自治体でも懸命に行っ

ごみの意識。

人が住む限り、ついてくる「ごみ」。18万人近くの人が暮らす立川市のごみを上手に処理できないかな、と少し考えてみました。でも、やはり難しい?

多摩のリーダー

立川市の燃やせるごみ減量目標50%が19%で少し足踏みしている。残り31%を伸ばすには、この会場に来ていない人々を巻き込む手法を検討するの一案かもしれない。多くの人を巻き込む手法は、そのものの公募やそのきつかけつくり、動画サイトなどで施設の作業や説明会の様子を見学できるようにするなどもある。相手がごみの問題であり、有料化を控えし難い時期ではあるが、ほかで行っていない手法で「ごみ広報」をしてほしい。若干勇気がいるのかもしれないが、立川市は多摩地区のリーダーという気概を持って新しい手法を考えてほしいと考える。(松井)

「ごみ対策課」内線67551
「ごみの有料化、出前説明会について」ごみ減量推進課・内線6755



市内で十数回行われたごみ有料化についての説明会。定期的な説明会はすでに終了しているが、5人以上のグループの要望に応じて、職員が出前説明会を行ってくれる。



分別されていないごみは、最終的にリサイクルセンターにて人の手で分別される。ごみは途切れることなく、異臭もある中で、作業の方の苦勞を垣間見た。意識を高めるためにも、施設見学をもっと推進してほしいのではないだろうか。

市民編集委員として活動してみませんか

市は「広報たちかわ市民編集委員」を募集し、特集記事(年1回)にかかわる企画・取材や執筆・編集など、市民の皆さんによる紙面づくりを行っています。平成27年4月末までを活動期間とする第4期委員を、3月以降に募集します。くわしくは今後の「広報たちかわ」をご覧ください。ご応募は、お問い合わせください。



お問い合わせ先
tackikawa@city.tachikawa.lg.jp

広報課・内線2744